

第2節 社会

1 基本的な考え方

(1) 社会科における学習意欲を高める指導の基本的な考え方

平成20年に改訂された小学校学習指導要領において、社会科の目標は、「社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」と示されている。この目標からは、社会を「自分のこと」としてとらえることの大切さを読み取ることができる。社会生活を営むのは「私たち」であり、国土と歴史の学習の対象は「私たちの国」である。

「国家・社会の形成者」とは、まさに国家や社会をつくっている「私たち」のことにほかはない。また、社会を「自分のこと」としてとらえることが、我が国の国土と歴史に対する愛情を育てることにつながる。

私たちの国や社会といった身近なことがらを学ぶのだから、児童は興味をもって社会科を学習していると思われるのだが、社会科の学習がつまらない、面白くないという児童はけっこう多い。その理由を指定研究員の所属する小学校の先生方に尋ねると、「社会科の学習は身近な社会を扱うのだけれど、その社会が近いようで遠い」という声があがった。身近であるにもかかわらず、授業で児童がその身近さを実感できないことが、社会科の学習をもどかしく、つまらなくしている一面があるように思われる。

したがって、児童の社会科に対する学習意欲を高めるためには、授業において身近さを実感できるような仕掛けが必要であると考えます。新学習指導要領においても、指導計画の作成に当たって、「地域の実態を生かし、児童が興味・関心をもって学習に取り組めるようにする」ことや「身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を取り入れるようにする」ことが求められている。

(2) 学習意欲を高める指導方法の工夫

ア 身近な地域の教材化

子どもたちが社会や歴史を身近なこととして考えるためには、どのような工夫や手だてが必要だろうか。

身近な地域を教材化することはそのための第一歩であり、きわめて有効な方法である。教育研究所では、本県の文化財や歴史を紹介する『大和路の文化財』や『たのしい奈良の歴史』等のテレビ番組を長らく制作、放送してきたが、これらの貴重な映像をより学校で活用しやすくするため、平成20年度から3年計画で静止画・ビデオクリップ集の作成に取り組んでいる。平成22年度には県内各校に配布予定なので大いに活用いただきたい。また、本教育研究所の研修講座においても、ここ数年、身近な地域の教材化を研修テーマとして取り上げている。県立橿原考古学研究所附属博物館や県立民俗博物館と連携した講座、県内に3つある世界遺産を積極的に授業で生かすための現地研修などがそれに当たるが、こうした研修をきっかけに、教員自らが身近な地域を教材化するための視点を意識的にもち続けることが大切である。

イ 言語活動を通じた主体的な学び

さらに重要なことは、身近な地域を教材化するだけでなく、これらをもとに社会や歴史を

「自分のこと」としてとらえさせ、考えさせることである。このことは、今回の学習指導要領の改善の基本方針に示されている「日本人としての自覚をもって国際社会で主体的に生きるとともに、持続可能な社会の実現を目指すなど、公共的な事柄に自ら参画している資質や能力を育成すること」と深くかかわっている。「国家・社会の形成者」としての主体的な学びが求められているのであり、このような「主体的な学び」をどう実現するかが問われているのである。

今回、このような主体的な学びを実現する手がかりとして、学習指導要領改訂における教育内容に関する主な改善事項の一つである言語活動の充実に着目した。小学校学習指導要領総則では「各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること。」と示している。

中央教育審議会答申（平成20年1月）では、小学校社会科における改善の具体的な事項について、「…観察・調査したり、各種の資料から必要な情報を集めて読み取ったりしたことを的確に記録し、比較・関連付け・総合しながら再構成する学習や考えたことを自分のことばでまとめ伝え合うことによりお互いの考えを深めていく学習の充実を図る」と示している。

小学校社会科における言語活動の具体的な方法については様々なことが考えられる。今谷順重（2009）による例示をあげてみると

- 観察・調査や資料活用を通して必要な情報を入手し的確に記録する学習
- 社会事象に関する基礎的・基本的な知識・概念や技能を明確化し、確実に修得しながらそれらを活用する学習
- 各種の資料を効果的に活用し、社会的事象の意味などを解釈したり事象の特色や事象間の関連を説明する学習
- 考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことによりお互いの考えを深めていく学習
- 学校図書館や公共図書館、コンピュータを活用して、資料の収集・活用・整理などを行うようにする学習

などがある。こうした言語活動の充実を意識した学習は、教材に主体的にかかわろうとする態度を要求するものであり、必然的に教材を「自分のこと」としてとらえようとするものと重なってくる。社会科における「主体的な学び」とは、つきつめるとこのような学習態度であると考えられる。

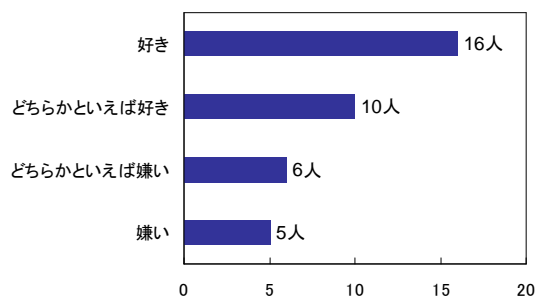
このような観点から、言語活動の充実を意識した授業を展開することで、児童の学習意欲を高めることができるという仮説のもと、小学校第5学年の「通信や情報」を扱う単元について授業モデルを提案するべく、研究を進めた。この単元は、急速な情報化社会の進展を受け、今回の学習指導要領で大きく改訂された部分の一つであり、情報化社会を主体的に生きるための能力や態度をはぐくむ上でも、児童が「自分のこと」として学ぶための工夫が一層求められていると考える。今回の研究がその一助になれば幸いである。

2 事例

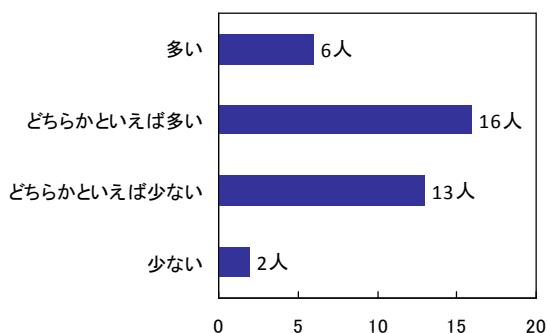
(1) 社会科授業の現状と課題

今回の研究に取り組むに当たって、学級で社会科の授業についてのアンケートをとってみると、グラフ1～3の結果となった。社会科の授業は「好き」「どちらかといえば好き」と答えた児童が26名であったのに対して、「嫌い」「どちらかといえば嫌い」と答えた児童が11名であった。好きな理由として、「知らないことをたくさん知ることができるから」「地図を見るのが好きだから」「日本の問題について考えるので、少し大人になった気分がするから」「楽しくて学びが多いから」「身近なことを授業で知ることができるから」などであった。嫌いな理由として、「ノートに書くことが多いから」「覚えることが多いから」「覚えることが苦手だから」などがあり、社会科＝覚える教科というイメージが児童の間に少なからずあり、そのことが社会科を嫌いにさせていることがうかがえる。

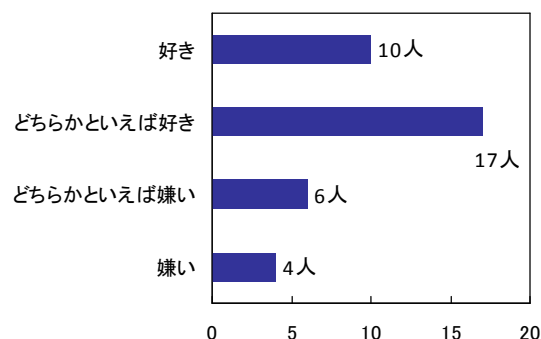
社会科の授業では、これまでから、自分の考えを話したり書いたりする機会を多くとってきたが、グラフ2、3からは、こうした言語活動についての児童の評価がまちまちであることがわかった。また、自分の考えを話したり、書いたりすることがあまり好きではないと思っている児童が学級の4分の1以上いることもわかった。言語活動の機会をただ増やせば、社会科が好きになるというものでもない。児童の関心・意欲を高めるような言語活動の工夫が重要だと考える。



グラフ1 社会の授業は好きですか



グラフ2 社会の授業で自分の考えを話したり、書いたりする機会が多いですか。



グラフ3 社会の授業で自分の考えを話したり、書いたりするのは好きですか。

(2) 単元計画の作成

ア 単元名 「わたしたちのくらしをささえる情報」(第5学年)

イ 単元計画の作成に当たって

単元計画の作成にあたり、今回取り上げた「通信や情報」を扱う単元について、少し触れたい。

児童がインターネットを使用する機会が多くなり、携帯電話を使用する児童は今後更に増えてくると思われる。情報化社会の進展は確実に児童の身の回りに及んでおり、児童はその利便性を享受すると同時にその危険性にもさらされている。これまで、「通信や情報」を扱った単元では、テレビ局や新聞社などへの社会見学を組み入れ、これらの仕事に従事している人々の工夫や努力を調べることを通して、通信や情報などの産業が国民の生活に大きな影響を及ぼしていることや、情報の有効な活用

が大切であることを考えさせようとしてきた。しかし、情報化の進展により、情報を活用するとともに様々な情報に対して適切に判断し行動する能力が求められるようになってきている。つまり、情報化社会を主体的に生きることのできる能力が求められているのであり、新しい学習指導要領でこの単元が大きく改訂されたのもこうしたことを反映していると考ええる。

児童にとって、情報は身近にあふれているものであるにもかかわらず、見えにくいものである。その情報を身近に感じられるようにするために、今回は県内のラジオ局を取り上げ、情報の受信と発信の両方の面から実感を伴った学習をさせたいと考えた。

ウ 言語活動の充実を意識した単元計画の作成

今回の学習指導要領改訂における教育内容に関する改善事項の一つに言語活動の充実がある。言語活動と言っても様々な活動が含まれるが、本単元では、自分の意見や考えをまとめて「書く」活動や、学級の仲間と意見を交流させたり、交換し合ったりする「話し合う」活動を充実させたいと考えた。

単元計画の作成に当たっては、「みつける」「しらべる」「ふかめる」「ひろげる」という四つの段階に分け、学習場面を設定した。学習活動を進めていくなかで、課題発見から課題追求へ、そして、課題解決について児童自身が考え、仲間と意見を交換・交流し、知恵や知識を深め、発信していくという流れを作ることによって、学習効果が上がると考えたからである。それぞれの学習場面において児童の言語活動を充実させ、話し合う・書くなどの場面を設定した。

エ 評価規準

	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断	ウ 技能・表現	エ 知識・理解
単元の評価規準	身の回りの情報に関心を持ち、情報の働きや活用方法について意欲的に考えようとしている。	情報化社会の利便性と危険性を考え、情報を適切に判断し活用することができる。	調べたことや考えたことを基にして、分かりやすく表現したり、課題に沿った話し合いをしたりできている。	情報とくらしとのかわりや、情報化社会の利便性と危険性について理解できている。
具体的評価規準	①自分たちの生活と地域の情報産業との結びつきに興味を持ち、学習課題に意欲的に取り組もうとしている。 ②資料に興味を持ち、資料を活用して考えをまとめようとしている。 ③発信しようとする情報について、積極的に考えたり話し合ったりしている。	①情報化社会の利便性と危険性を理解した上で、情報を適切に判断し活用することの大切さを考えることができる。 ②情報を発信する上で、どんな情報が大切かを考え、適切に取捨選択ができている。	①インターネットなどを活用して調べ、その結果を分かりやすく整理し、表現することができる。 ②発信しようとする情報について吟味し、適切に表現することができる。	①くらしや産業と、情報との結びつきに気付き、様々な形で情報がくらしや産業に生かされ、必要とされていることを理解している。 ②情報化社会の利便性と危険性を理解している。

オ 単元の展開

(7) 「みつける」段階

情報とは何か、といきなり言われてもなかなか説明しにくいものである。そこで、児童の身近にある情報を具体的に紹介し、身の回りにはどんなものがあるだろう。さらにそれらの情報はどこから得ているのかについて話し合わせた。児童からは、テレビやラジオ、新聞、携帯電話など具体的な情報入手の手段があがってきた。これを受け、「私たちの身近にある情報は、どのようにして発信されているのだろうか」という次の学習課題につなげた。

単元の流れ・児童の活動 (○)	指導上の留意点	評価
①身近な情報を知ってみよう。 ●身の回りの情報には、どんなものがあるだろう。 ○テレビのCMや携帯メール広告などから情報を読み取る。 ●情報って、何だろう。 ○自分たちにとって、情報とは何かを考える。 ●身の回りの情報は、何から、どうやって伝わってくるのだろう。 ○身近な情報入手方法にはどんなものがあるのか、情報を出し合い、話し合う。 ・テレビ ・インターネット ・ラジオ ・新聞 ・本や雑誌 ・広告 ・郵便 ・携帯電話 ・Wii ・家の人	・マクドナルドのテレビCMや、スーパーの携帯メール広告などを提示し、情報を読み取りやすいようにする。 ・自分が知り得る身の回りの事が全て情報であることに気付かせる。 ・身の回りには、たくさんの情報入手方法があることに気付かせる。	・発言 ・メモ 【ウー①】 【アー②】 【エー①】

(4) 「しらべる」段階

「私たちの身近にある情報は、どのようにして発信されているのだろうか」という学習課題について、子どもたちにとって身近な情報源であるテレビと、家の人が時々聞いているというラジオにしぼって、調べていくことにした。ここでは、校内のパソコン室を利用し、テレビとラジオのどちらか、児童が調べてみたい方を選ばせ、分かったことをメモ用紙に書かせ、模造紙にはっていた。児童にとって身近な存在であるテレビは多くの情報が集められたが、ラジオに関する情報を集めようとした児童は少なかった。最後に、自分たちが住む広陵町のホームページをのぞいてみた。半数以上の児童が、「(広陵町のホームページを) 見たことがない。」と答え、感心しながら、熱心に画面を見ていた。広陵町立図書館の情報や本校の情報などを検索している児童もいた。

時間内に調べきれず、もう少し調べてみたいという思いをもち、家のパソコンで調べてきた児童もおり、学習への興味・関心が持続しているという手応えを感じることができた。

単元の流れ・児童の活動 (○)	指導上の留意点	評価
わたしたちの身近にある情報は、どのようにして発信されているのだろうか。		

<p>②テレビ局とラジオ局から、情報がどのようにして伝わってきているのか、調べてみよう。</p> <p>●身近な情報が、どこから、どのようにして、発信されてきているかを調べてみよう。</p> <p>○調べて分かったことをメモ用紙に書き、模造紙にはり、発表する。</p> <p>●地域の情報ネットワークを探ってみよう。</p> <p>○インターネットを活用し、広陵町のホームページを探る。</p>	<p>・インターネットの活用についても助言する。</p> <p>・広陵町ホームページには、自分が知りたい情報が掲載されているのか、また調べたいことが調べられるのかについて探るように助言する。</p>	<p>・真美二メモ</p> <p>【ウー①】</p>
---	---	----------------------------

(ウ) 「ふかめる」段階

「しらべる」段階を受け、情報を伝える産業と私たちとのかかわりについてさらに「ふかめる」段階へ学習を進めた。奈良にある2つのFMラジオ局のうち、本校に距離が近い「FMハイホー」取材することにした。当初、児童の見学を考えたが、本校からFMラジオ局までの移動時間や見学時間から考えると授業時間が大幅にふくらんでしまうこと、FMラジオ局の広さから大人数での見学は困難と思われることから、指導者が、生放送の様子、放送ブースなどをビデオ撮影させてもらい、資料として活用することにした。

「FMハイホー」は、平成11年7月に開局した。事業内容は主に王寺周辺広域市町村圏の地域情報提供を中心としたコミュニティ放送事業や非常災害・緊急事態における公共放送及び通信事業、地域企業を中心としたCM制作及び放送媒体事業などである。平成7年の阪神・淡路大震災をきっかけにコミュニティ放送の重要性が認識されるようになったが、奈良地域のラジオ局がなかったことから、地域の安全を守るために開局したという話を紹介し、災害時における放送の役割について考えさせた。

また、情報が公共的な役割を果たしていると同時に、経済的な価値を有していることにも触れた。芸能人の写真を何枚か提示し、テレビのCMを思い起こさせて、こうした写真もお金を生み出すことを説明した。その際、肖像権や著作権にも簡単に触れた。日ごろ何気なく見たり、聞いたりしているテレビやラジオではあるが、このような背景があることを知り、驚いた様子であった。

次に、情報化社会の利便性と危険性について考えさせた。ボタン1つで知りたい情報が手に入り、メールなどで情報のやりとりができる情報化社会の利便性と、有害サイトをはじめ、ウイルスやチェーンメール、インターネットを悪用した詐欺などの危険性についても考え、意見を出し合いながら話し合った。携帯電話を個人的に使用していたり、更には個人的なブログを開設していたりする児童もいる。情報化社会を主体的に生きるためには様々な情報を適切に判断し、有効に活用する能力や態度を身に付けることがいっそう求められるようになってきている。

ここでは資料として次に示した自作の広告（実際に使用したものを一部改変した）を使用し、情報を手にしたときの受け手側の判断力の大切さについて考えさせた。「南極産のアイスクリーム？」な

どの声があがり、広告を見て、その内容の正確さについて真剣に考えている様子がうかがえた。また、タレントの写真やアニメのキャラクターを使用していることについて疑問の声も出て、情報が経済的な価値を有していることについて学習したことが児童に定着し、それに基づいて思考・判断できていると感じることができた。



図 1 自作の偽の広告

単元の流れ・児童の活動 (○)	指導上の留意点	評価
<p>③④情報を伝える産業と私たちとのかかわり</p> <ul style="list-style-type: none"> ●ラジオ番組作成に携わる人達の働きを知ろう。 ○資料から分かったこと、疑問に思ったことをメモ用紙に書き、メモを基に話し合う。 <p>●地域の安全を考え、ラジオ番組を守る人達の工夫や努力を知る。</p> <p>(災害情報・気象情報・交通情報・地震情報など)</p> <p>○発信側の工夫や努力を知り、話し合う。</p> <p>●産業と情報との関係を考えよう。</p> <p>○情報がお金になることに気付く。</p> <p>⑤情報化社会の利便性と危険性</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ FMハイホーでの資料映像を見せ、番組作成の様子がわかるようにする。 ・ 阪神大震災時の映像を見せ、FMハイホーがどうして起業したのかを考えさせる。 ・ CM映像やタレントの写真を提示し、情報がお金になることに気付かせる。 	<p>【ア-①】</p> <p>【エ-①】</p>
<p>わたしたちは情報の受け手として、どんなことに気を付けなければならないだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●情報化社会の表と裏を考えてみよう。 ○情報化社会の利便性と危険性について話し合い、その内容を整理する。 ●受け手(受信側)のモラルや判断の大切さを学ぼう。 ○情報化社会の危険性に気付くとともに、情報 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 情報化社会の長所と短所を話し合い、便利な面と危険な面があることに気付かせる。 ・ 自作の広告を配布し、情報のもつ利便性と危険性に気付かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 発言 ・ 真美二メモ 【イ-①】 【イ-②】

の受け手としてどのようなことに気を付けると
良いか話し合う。

【エー②】

(エ) 「ひろげる」段階

情報の発信側の工夫や努力、受信側としてのモラルや判断の大切さについて話し合ってきた後に、学習の最終段階として「本校を紹介する」というテーマで、自らラジオ番組で情報を発信してみるという活動を取り入れた。写真1は、「FMハイホー」に出演することを児童に伝えたところである。

「出演決定」を知った瞬間、教室は大いに沸いた。原稿作成に当たっては、まず児童が個々に発信内容を考え、次にグループで話し合っふるいにかけ、最終的に学級全体で話し合っまとめるというピラミッド型の集約をしていった。写真2は、グループで話し合った内容を板書している様子である。最初、児童から出された内容は、広陵町の場所、学校の児童・教師数、運動場の広さ、飼育小屋のこと、月ごとに変わるチャイムのこと、ナス畑のこと、校内に古墳があること、学校行事のこと、エコ活動のことなど様々であった。グループで話し合う中で、2分間という限られた時間で何を発信すればいいか、また聞く側にとって価値のある情報とは何か、ということに自ら気付いていったように思われる。最終的には、



写真1 「出演決定」を披露



写真2 グループの意見を板書

児童数、チャイムが月ごとに変わること、校内に古墳があること、図書室の蔵書数が多いこと、運動場の水はけがよく雨が降ってもすぐに運動ができることの5つの柱で原稿をまとめることになった。

その後、実行委員会を立ち上げ、原稿の見直し、録音作業などを経ていよいよ1月29日の放送当日を迎えた。「FMハイホー」の御好意で、給食時間に合わせて放送されることになり、児童は期待に胸をふくらませて放送を待っていた。放送の瞬間、自分たちで考え練り上げた原稿が、ラジオから聞こえてくることに不思議な感じがした児童も多かったようで、静かに聞き入っていた。放送後、保護者や町の教育委員会の先生からも「聞いたよ。」というメッセージをいただいた。こうした声や他学年の児童も聞いてくれていたことを知らせると、「えーっ、本当ですか?」と、その反響の大きさや広がり驚いている様子であった。ラジオというメディアを通じて自ら情報を発信し、その反響に触れることで、自分たちが情報化社会の一員であることを実感を伴って理解できたことは、情報を扱う単元の学習の締めくくりとして有意義であったと思われる。

なお、今回はメディアとして、本校から比較的近いFMラジオ局を取り上げたが、マスメディアに限らず、情報を発信することにはいろいろな方法がある。児童自らが情報を発信しようとすることで学習意欲が高まり、情報の価値に気付き、発信した情報の反響（反響がないことも当然想定される）に触れることに意味があると考えられる。

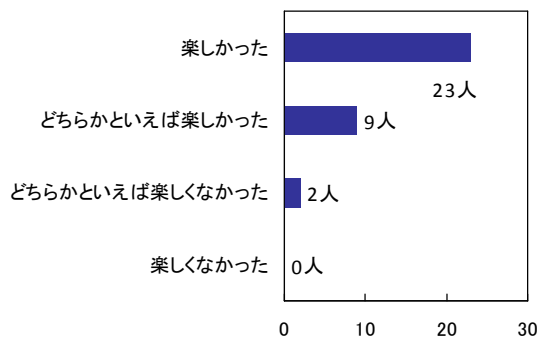
単元の流れ・児童の活動 (○)	指導上の留意点	評価
⑥⑦ラジオ番組に情報を発信してみよう。		

情報の送り手は、どんなことに気を付けなければならないだろうか。		
<ul style="list-style-type: none"> ●自分たちの原稿をラジオで発信してみよう。 ○どんな情報を発信するのか、話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・何を伝えるか。 ・その情報は価値があるのかどうか。 ・どう伝えるか。 ○原稿をつくり、内容を吟味する。 ○本校紹介原稿を録音する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・受け手と送り手にとって、それぞれどんな内容に価値があるのかについて考えさせる。 ・伝えたい内容を放送時間に納めるために、どうまとめれば良いか考えさせる。 ・原稿の内容をより高めるために、個人、グループ、学級全体と話し合う人数を段階的に増やして吟味させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 【アー②】 【アー③】 【イー①】 【イー②】 【ウー②】

(3) 成果と課題

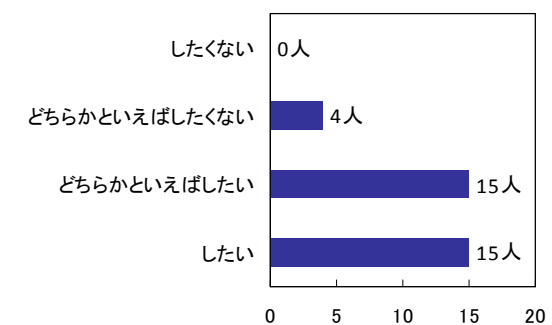
ア 児童の変容

本単元の終了後に再びアンケートを実施した。本単元の学習をどのように感じたかを尋ねたところ、90%の児童が「授業が楽しかった」又は「どちらかといえば楽しかった」と答えた。単元前のアンケートで社会科の学習が「好き」「どちらかといえば好き」の回答が70%であったことを考えると、学習意欲を高めたいという当初の目的は、本単元については概ね達成できたのではないかと考える。その理由としては、次の2点が考えられる。



グラフ4 「わたしたちと情報」の学習は、どのように感じましたか。

① 言語活動の機会を多く取り入れた結果、児童の興味・関心が高まり、学習意欲の向上につながったのではないかと考えられること。言語活動の機会を多く取り入れたことが児童の関心・意欲を高め、学習意欲の向上につながったことは、グラフ5からもうかがえる。



グラフ5 これからも授業の中で、自分の考えを書いたり話したりしたいですか。

② 「社会科」＝「覚えることの多い教科」＝「嫌い」という児童の意識の連鎖があるとすれば、今回の単元は覚えることが少なく感じられ、その結果として楽しく感じられたと思われること。

本単元の実施前と実施後のアンケート結果を比べてみると、社会科の授業について、実施前に「嫌い」「どちらかといえば嫌い」と答えていた11名のうち、10名が実施後のアンケートで「わたしたちと情報」の学習を「楽しかった」「どちらかといえば楽しかった」と答えていた。言語活動を意識的に

取り入れた学習を進めていくなかで、児童の興味・関心が高まり、学習意欲の向上が見られたことが、これらのアンケート結果からもうかがえる。

イ 今後の課題

今後の課題として、以下の点を挙げておかなければならない。

1点目は、社会科の指導において言語活動の充実をどう位置付けるか、という問題である。新学習指導要領で言語活動の充実が規定されているのは周知の通りであり、平成20年1月の中央教育審議会答申では「学校が各教科等の指導計画にこれらの言語活動を位置付け、各教科等の授業の構成や進め方自体を改善する必要がある。」と提言されている。本研究にかかわって国語科の学習との重複について指摘もいただいた。このことについてはまだ十分整理できておらず、社会科の年間指導計画における言語活動の適切な位置付けや他の教科等との連携（合科的な指導も含めて）については今後とも課題としたい。

2点目は、「社会科」＝「覚えることの多い教科」＝「嫌い」という児童の意識の連鎖についてである。これはこれまでも言われてきたことではあるが、なかなか改善策を見出せないでいる。しかしながら、言語活動を充実させていくことで、社会科としての基礎・基本を大切にしながら、知識・理解を活用する場面を増やしていくが大切ではないかと考えている。

参考・引用文献

- (1) 文部科学省(平成20年)『小学校学習指導要領解説』東洋館出版社
- (2) 中央教育審議会(平成20年)『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)』
- (3) 今谷順重編(2009)『人生設計能力を育てる社会科教育』黎明書房